

ニューヨーク、北京、モンドラゴン

2月、風雪舞う北米に労働者協同組合関係の短い調査にいった。ニューヨークは約20年ぶりの訪問であった。空港の入関検査は厳重で、中南米系の乳飲み子を抱えた夫婦は靴まで脱がされていた。私は靴を脱げとは言われなかったのだが、携帯したノートパソコンに係官はアルコール消毒してからゴム手袋で触れるという心配のしようであったのが、アメリカの脅迫観念を示していると思われた。ケネディ空港から市内にむかう途中の道は、20年前にはまだ未開発な地区があつて、赤茶けたいかにもインディアンから買った土地かと思わせる光景も残っていたが、いまでは施設や建物でほぼ満たされている。変わった景色といえばもちろん、9.11事件の国際貿易タワーであるツインタワーがいまは消え去っていることである。ニューヨークではぜひ見たかったのはグランド・ゼロであり、そこがまさに資本主義のもうひとつのシンボルであるウォール街のすぐ近所であり、資本主義の勃興と崩壊が背中合わせになっていることに感慨を覚えた。しかし、ここは日本の兜町や茅場町の界隈と何となく雰囲気似ているなど、野間宏の『さいころの空』的劃割りを思いだしながら、ウォール街を歩いた。巨大な建築工事現場の穴と化したグランド・ゼロを金網越しに眺めると、すぐその先は海である。3000人あまりの犠牲者たちは「ヒーロー」として名前がパネルに連なっているのはいかにもブッシュ的あるいはアメリカ的な表現であると思った。われわれは「ヒロシマのヒーローたち」とか「大空襲のヒーローたち」などと記念碑に刻むであろうか。

ニューヨークではシャリン・カスミアという大学で文化人類学を教える女性研究者に会うことを楽しみにしていたが、残念なことに彼女に急用が入って、こちらの短い滞在では時間の調整もつかずドタキャンとなってしまった。彼女は『モンドラゴンの神話』というスペインのモンドラゴン協同組合運動に関する批判的

な本を書いており、邦訳もでている。カスミアとは十五年前くらいにモンドラゴンにある彼女のアパートでしばし歓談をした、まあ一見の間柄である。アメリカでは一部の地域で労働者協同組合運動があり、また意外に思われるかもしれないが労働組合運動も古典的に強固な側面がある。私見ではカスミアの依って立つモデルは、そのアメリカの伝統的な労働組合運動、階級闘争理論であり、イデオロギー的要素を重視したモンドラゴン批判のいくつかの論点はずれていると思われるが、それでもモンドラゴン協同組合における一般労働者の不満をくみ上げて記述した彼女のフィールドワークは評価できるものである。

アメリカの労働者協同組合運動に関連して思い出されるのは、やはりニム・ウエルズ（「ウエルズ【ケルト系】の血」という意味のペンネーム）のことである。ニムは岩波文庫になっている中国における朝鮮人革命家キム・サン（金日成）の聞き書き『アリランの歌』の著者である。1987年に作家の李恢成氏が彼女を訪問している（「ニム・ウエルズ会見記」朝日新聞1987.11.2）。

エドガー・スノー夫人（1932年東京の帝国ホテルで結婚したという）でもあった彼女は1930年代に中国で宋慶齡、毛沢東、朱徳、鄧小平など多くの中国革命の主人公たちと友達となり、延安において抗日運動支援のために軍需物資生産のための小工場を組織化した。これは工合（グンホー）とよばれ、中国語では「工業合作社」運動と呼ばれるが、いわゆる労働者協同組合運動であった。「協同組合」という字は日本の造語であって、中国では「合作社」と呼ばれている。英語では工合は work together である。李恢成氏の記述にあるように、スノー夫妻はレウィ・アレイとともに工合運動を起し、解放後の人民公社運動の基礎を築いたといわれる。じつのところ、工合運動の中心人物はアレイであった。1938年に日中戦争がはげしくなってくると、抗日支援のためにアレイは、宋美齡と相談して、上海から武漢に移り、中国工業合作協会を立ち上げた。国民党も不承不精ながらも工合に賛成したので、翌1939年に香港に、欧米を中心として広範な国際支援を受けるための工合国際委員会が設立された。海外からの寄付献金はアメリカからが一番多く、ついでイギリス、オーストラリア、カナダであった。香港が預金の中継地であったといわれる（菊池一隆『中国工業合作運動関係資料目録・「工合」関係者へのインタビュー』、大阪教育大学、1993年）。毛沢東は1939年にアレイと会い、以後抗日地域に小さな合作社の促進がはかられた。2000以上の合作

ニューヨーク、北京、モンドラゴン

社がつくられ、軍需品や消費財が作られた。アレイは積極的に技術指導に当たった。革命後の人民公社運動は、毛沢東とより協同組合的な経済体制を作ろうとした劉少奇(彼に協同組合論の著作あり)との対立もあり、実際にはその歴史的経緯は複雑であるが、工合運動は過去のものとしてされた。しかし、結局失敗した人民公社運動が上からの官製のものであったのに対して、工合運動は、あくまでも下からの、デモクラテックな性格を重視したものであった。工合運動は革命後一時期細々と開店休業のような状態であったが、1983年に中国工合国際委員会として復活した。なにしろ革命指導者たちが関わった工合はいかなる政治的な嵐の中でも、完全に消え去ることはなかったようだ。

レウィ・アレイ(Rewi Alley,1897 New Zealand—1987China)は、ニュージーランド人である。アイルランド系の移民の子孫で、父親は農業協同組合運動家だった。第一次大戦に志願兵として行ったヨーロッパで負傷した。上海に1927年に訪れ、それ以後、死ぬまで中国にとどまった。アレイは抗日戦争のための石油資源確保の必要性を重視して、1944年に甘粛省山丹県に工芸学校を設立した。革命後の1953年その学校は石油技芸学校と名称変更された。また、アレイは1961年に広島での第七回原水爆禁止世界大会に出席してから1965年まで原水禁大会に参加した。当時は、また現在でもそうであるが、日本の革新勢力に労働者協同組合運動という考えがほとんど念頭になかったため、もしあれば貴重な議論ができた筈だろうと惜しまれることである。

工合運動は、理論的にはその欧米直輸入的な「民主性」を特徴としていたが、革命後は、その役割はほとんど消滅していた。しかし、細々生きていたのは、中国がその生産組織において、公司、人民公社、合作社などいずれも、親方日の丸的な官製の企業組織を主体としながらも、一方で「真の協同組合原則」をもった工合を、いわばパイロットプランあるいはアンテナ・ショップ的に温存しながら、実験研究の道具として見直されたからである。いわゆる工合運動は抗日時代のものを指すが、新しい工合運動の位置づけがなされたのである。

私が北京の工合国際委員会を訪問したのは1993年であった。事務所は中国人民対外友好協会の敷地の中にあつた。まさに錚々たる革命人士たちの後ろ盾があるのだなと実感させられた。訪問の目的は、日中間における労働者協同組合運動の連携であつて、私はコーディネーター兼通訳(英語)であつた。工合側は、国

際委員会に日本から理事として参加してほしいという考えがあり、理事のポストを一つ事前に用意していた。理事にはアメリカ、カナダ、ニュージーランド、タイ、イギリス、ベルギー、香港、メキシコなどからもそれぞれ一人ないし数人が就任していた。工合側は理事就任の見返りとして日本円で20万円程度の寄付を期待していた。私は、理事就任受諾を強く勧めたが、結局日本側が固辞したので、残念ながら中国工合と日本の労働者協同組合運動との関係はその後ほとんど途絶えることになってしまった。

当時中国は、市場化に向かって新しい企業形態の法制度化を模索中で、郷鎮企業とか城鎮企業といったものとは別に「集体企業」法や「個体企業」法を作りつつあった。人治主義の国が法治主義の国になるための法律をいくつも作りつつある状況であった。最近の報道では中国も生産手段の私有を認める私企業を制度的に是認したようである。とはいえ、労働者が主人公になる民主的な共同所有の企業の選択肢も捨てたのではないだろう。中国の協同組合思想の流れは厚く、辛亥革命以降、革命前まで連綿と実践的に取り組まれていた（菊池一隆「中国初期合作社史論」、『中国国民革命の研究』所収、1992年）。もし、中国革命後マルクスが言うような社会主義における生産手段方式を真のアソシエーション（協同組合）形態を採用していたならば、歴史はどう変わったであろうか？ その中国の経済民主主義の形態はひとつのモデルになったのではないか。

中国はモンドラゴンと盛んに接触している。私はモンドラゴンの町で中国人に何度か出くわしたことがある。現在モンドラゴンは中国においても電機製品合弁工場が稼働している。中国側のモンドラゴンモデルに対する基本的な関心は、資本主義的な市場経済の中で、いかに民主的参加的な経営を行い、中国の「社会主義的市場経済」をなかでそうした企業形態が存続できるかという問題意識からである。1993年の工合による視察ではモンドラゴンからの次のような教訓を引き出している。

①モンドラゴンの創立者アリスメンディアリエタ神父が協同理念構築にさいして毛沢東、マルクス主義文献を読んで参考にしていたこと。労働は資本に従属するというアリスメンディアリエタの考えは重要であること。とりわけビジョンと現実の経済活動とを結びつけた態度。アレイの役割はアリスメンディアリエタのそれに似ていると述べている。

ニューヨーク、北京、モンドラゴン

②協同組合発展のために教育と技術訓練を重視したこと。理論と実践の現実的統一。

③モンドラゴンの協同組合原則がつねに現実の変革と調整と結びつけられていること。社会的平等と市場での競争力を両立しようとしていること。

④協同経済のために労働者銀行を設立して推進役としたこと。労働者が財源調達のためにみずからの金融機関を持つことの重要性。中国における信用協同組合推進の実験的取り組みの必要性。

⑤科学技術の研究開発を重視していること(独自の製品開発研究所をもっていること)。それはなによりも市場競争に勝つために必要なことである。将来への開発投資。

⑥しっかりした協同組合法制度を確立していること。中国には企業の種類を規定する法律が少ないこと。中国における民主的運営・公正剰余金分配制度を含んだ労働者協同組合法的性格をもった法律の必要性。

1950年代には北京の人民大学や上海の復旦大学には協同組合経済科があったという。その後、全人民所有の国有企業理論の蔓延により協同組合経済研究は消滅するにいたった。しかし1980年代に入って再び、協同組合経済講座が復活することになった。かくして工合運動の実験的再開が決まり、技術学校、障害者による工芸協同組合、技術開発センターなどが作られた。

中国の社会主義的市場経済は単に私有化の道を歩いているのではなく、さまざまな選択肢を考えつつ、経済開発に取り組んでいる、そこに中国的ふところの深さがあるのだと思われる。こうした三題咄しをニューヨークのホテルの部屋で、同僚と買って来た中華総菜を肴にスペインワインを飲みながら喋りあったのであった。